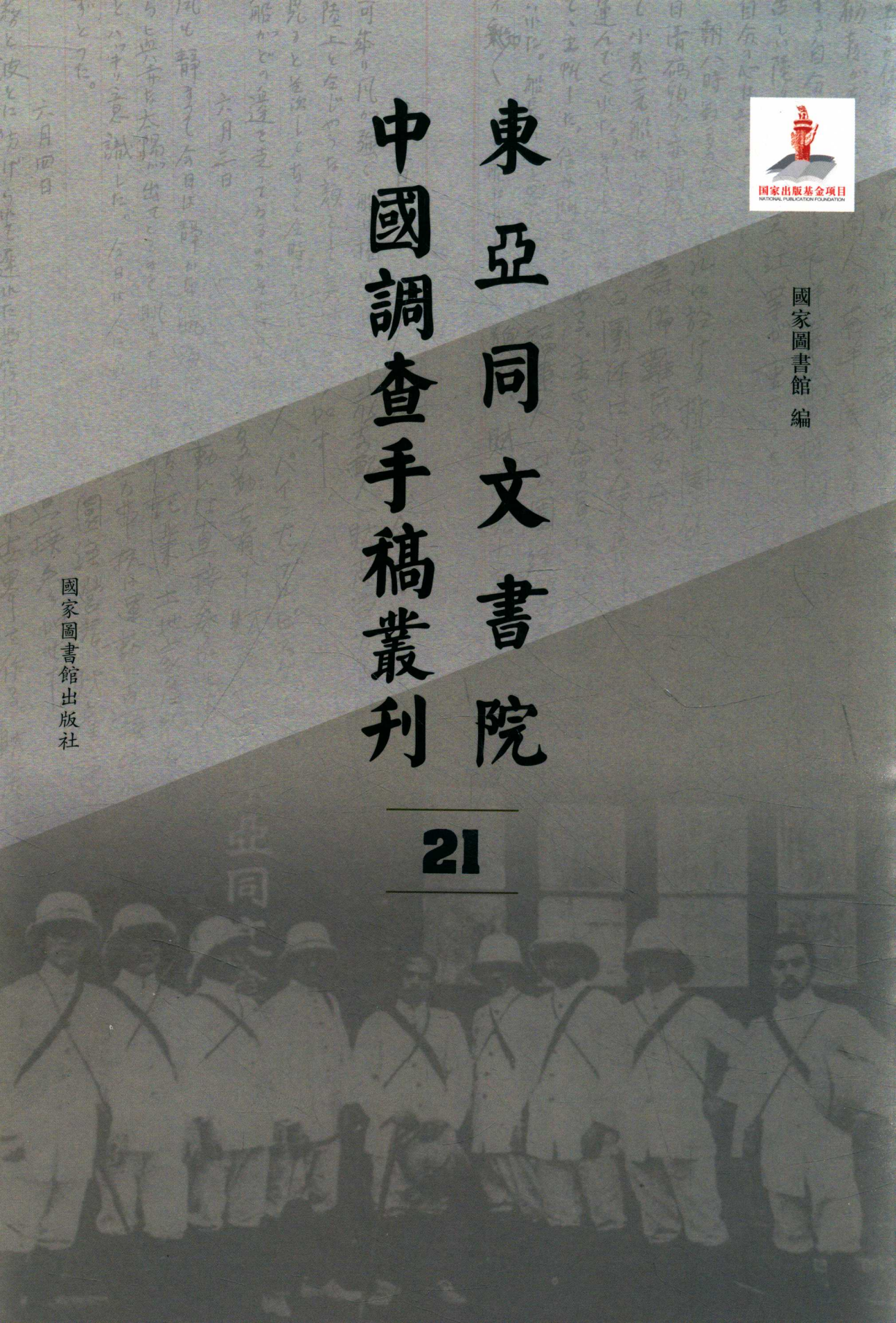
東亞同文書院中國調查手稿叢刊

21

國家圖書館 編

國家圖書館出版社



國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

東亞同文書院中國調查手稿叢刊

21

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

第二一冊目録

昭和四年(一九二九)旅行日誌(第二十六期生)

若宮二郎　第三十九巻……一
牧野清　第四十巻……七七
前田増三　第四十一巻……一四七
宮野茂邦　第四十二巻……二三五
石田七郎　第四十三巻……二八九
川瀬徳男　第四十四巻……三五九
佐多直丸　第四十五巻……四二七
村松彰　第四十六巻……四七七
吳鷹之助　第四十七巻……五七三

呼倫墨黑交通路

調查旅行日誌

第二十六期生

若宮二郎

東亞同文書院調查報告用紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東亞同文書院圖書館

第三十九巻

調査旅行日誌

（呼倫墨黑交通路経済調査班）

藤富平郎

「はしがき」

指を屈すれば最早半載の昔である。吾等が書院の大命を受けてまさに粤漢鉄線の旅に上らんとした直前たまたま勃発したる両廣湖南の戰乱は遂に吾等が行手を阻んでしまった。その結果此度に少然的に旅行線変行を餘儀なくされたが使命を帯びる吾等の心はやむよしもなく呼倫墨黑交通路と言ふ書院旅行隊未踏の地へ敢然としてわけ入らしめたのである。

斯かる止むなき事情の為め旅支度に際しては何等豫備智識を得る機もなくたゞ旅の途中に於ける先輩諸氏や知人の士の御指導にその大略を知るのみにて極めて浅薄なる智識をも

東亞同文書院調査報告用紙

顧みず豫定のコースを踏破してしまったのである。即ち吾等は上海を発して海路北へ、満目荒涼たる満州の広野を過ぎてハルビンに至り汽車呼蘭を起点とし海倫―克山―墨爾根を経て黒河に達し水路アムールを下りズンガリーを遡りハルビンに立ち戻ったのである。

これに費したる日数四十五日。即ち茲に物せる区々たる小冊はこの通りすがりの旅人の耳にひゞき、眼に映じ、心に感じた事どもをそのまゝその日その日に誌したものに過ぎぬ。然れども来らんとする半載に江南の要会に別離を告げてまさに恐ろしき人間苦、社會苦の試練を未知の十字街頭に受けねばならぬ日を考へる時、漠北六旬の旅そのものが貴重な人生的体験であったことを感謝するものである。

昭和四年
六月二日 晴

初めて大陸渡航の旅に出でんとする宵は新しき国に新しき驚きを得んとする歓喜に心は騒りて止むよしもなく暁の夢ははるかに朔北万里の空をかけめぐりてゐた。　鹿島立ちの朝である。午前七時半豊吉諸先生と袂別し、指宿と美歳の声の裾に四名は自動車二台に分乗して雄々しく校門を辞した。アカシヤの新緑水々しい並木道を自動車は日章旗を朝風になびかせつゝ快よく走る。所はまだ静かだ。旅立つ朝はさわやかである。人は大道闊歩。我らは自分達を見送る吳小る多くの要ある達が来て吳れた。桃原三年の夢を破るかの如き一筑前の音と共に奉天丸が静かに動き出したは、悠壮なる送別の歌と院歌の合唱、続いて起こる美歳の声。すべてを感激と感涙の交錯である。懐しき友よ、大上海よ、又の日にか會はん。かくして吾等四名は鴻

東亞同文書院調査報告用紙

程美里の旅に上つたのである。

船中は東亜新交通路北西斜線及松花江流域班と同乗である。黄浦江の濁流にもなつかしさを感じつゝ船は東支那海に出た頃はもう往然や感ず。囲碁や将棋に時間をつぶした。三年級の時に学んだ旅行用語を開いてみた感心な人もある。これこそ旅の眞摯なる探究者の態度であるべきだ。青島まで乗る人とおぼつかない庶産にも快を求めた。夜八時頃より、上海ものは旅の慰安として買つた酒を酌んで雑談に耽る。今宵は闇夜である。星の瞬き三つ五つ。明日の日和は晴れるやら。

六月三日(月) 快晴。

明るければ天氣晴朗。海上平穏、春天丸は油の如き波の上を滑る様に軽々走る。甲板にてハルピンまで帰ると言ふ露人と語る。十時頃黙々として行手に島影を見る。青島だ。晝食を喫す

る時先輩新岩青二氏の御出迎ひに會ふ。久し振りの會合にて有難し。自動車に乗せられて市中見物に出かける。先づ青島神社に参拝して行く手の幸を祈る。（青島には日本大廟と云ふ）。舞鶴湾を過ぎ忠海を過り砲台跡に登りて紀念撮影。山蔭に残る二の塹壕の有様を見て去りし日の猛々の柱東勢力の偉大さを想像すると共にこの山東の一角でさへ砲火を交へた事はの大戦の恐ろしさを偲んだのである。

「アカシヤの香りは富士の様だ」と批評した人があるかまことにそうである。青い山、紅い屋根、六月の白い陽光。青島の町はかがやく様だ。三年前の夏こゝを訪れたが何時来ても良い避暑地だ。海は青い絶好の海水浴場がある。啊かあれば一掬み掬みてみたかも知れぬ。町の様子は以前とも変りはないが済南事件山東出兵が帰国したため急に淋しくなつたと言つてゐた。上海を一歩出てもう此方

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まで来れば北支景があざやかに分るから嬉しい。満鉄で貨物を
担ぐ苦力までも我等が大先生なんだ。如何なる関係かして
か此の地の交通は左側通行である。汗ばんだ身体を民国
ホールに休めて渇を医す。音に名高き山東イナゴの市販を見
食った。帰途森本氏を鈴木洋行に訪ひ六人にて[illegible]に夕食を
共にし互いに健康を祈り再会をちかって四時半乗船、五時大連
さして出帆。青島小学校の修学旅行隊と同船、雀のさへずりに
も似たるその騒しさ。夜遂に寝られず。食堂テーブルの上にて、辛い
修業をなすなり。

六月四日(火)曇勝ち。

海上雲霧深く曇勝ちなる旅の空。十時過ぎ旅順の沖なる
島影を見るや見ざるや眼前に煙突の都、大連市の雄姿を
見る。十二時半埠頭に着。北満鉄道班伊藤、宇田両君をまぢめ

先輩多門山口氏の出迎ひを受く。早速宿の交渉を始めたが生憎満鉄の寮には間房なしとの報に直ちに馬車を駆って海務協會に入りて休息。かくして南満の一角に旅の第一歩を踏みし心地のである。その言ひ知れぬ喜びの感じ。この流れを所の銭湯にて清めして南満空気に小野氏を訪ねんとすれば和田喜一郎氏の来訪を受く。共に市中を散歩すれば井田捨男氏に會ひ夕食の饗を受く。七時児玉寮に小野氏を訪ひ、多門、和田両氏等来る。共に獨身者のさびしかな生活である。浪速町を散歩し夜宿に懐中電燈を頼りつて歩く。久し振りに日本に帰った様な気持となったが市中到る所満鉄王国の臭ひと色彩の濃厚なるのには少からず感情を害された。蓋しこの地ほど殖民地にて日本気分の濃厚なること他に無からう。

珍客を迎へて宿の南京虫はホクホクの歓待旅に出て以来最初の

東亞同文書院調査報告用紙

功績を施した訳けである。

六月五日(水)晴。

日本、上海へそれぞれ通信す。土時満鉄埠頭事務所を訪ね紹介状を取り出して高久肇氏を拝會す。旅行線及調査課員につき、各自の希望を尋ねたが、氏の語る所に依れば、ハルピンを出て眞直ぐ北上、黑龍江に出る通路は目下夏期にて殆んど通行不可能ならん、その上黑河まで出ても水路黑龍江を下る船あるやなやの保なしとの由、少からず意氣沮喪したのであるが一通りの豫備調査はこゝにて終へたのである。池田耕一氏を埠頭に訪ぬ。二日再び事務所調査課に至り参考書を聞く。帰るに及びハルピン調査課竹内氏及参謀本部森岡大佐(奉天)に宛て夫々紹介状を仰ぐ。

和田義一郎氏と共に星浦へと散歩に行く。太陽没する頃静かな

る夕凪ぎは日本松島の海を彷彿せしめる。晝の暑さをこゝに凌いだ人々は各自打連れて帰つて来た。一粒の珠しさ（広ずる夕暮、アスファルトをドライブして帰る。九は悔勢悩倉を引あげて夜汽車に投ず。先輩張氏多数の市見送りを受けなる。旅程遥々前途洋々。一行元氣百倍。十時四十分物凄い汽笛と共に別れを告げた汽車は一路北へ北へと闇をついてひた走った。江南の夢会に三年有餘相當文明人化した穢りび車中にも布を持ち込んだが混雑と空氣の為め眠り難し。

六月六日（木）晴。暑し。

見渡す限り一尺ばかり延びた高粱畑の廣がりである。六月の陽光に砂は焼けたゞれて居る。これが南満の大平野である。

朝十時奉天に安着、ステーションに先輩方沢氏を訪ねるに不在、幸にして安武氏の市井氏にて駅前大丸旅館に投ず。

東亞同文書院調査報告用紙

盛京時報を一寸訪ひて思ひ切り再びお邪魔することを約して出る。
川瀬君と二人ひけをぶらつく。暑さは眼ちのる。公園に至りプールに
泳ぐ。夕風呂を浴びて西田病院に至る。奥様が大久保君の母の
親戚なりと言ふ。程なく歓待を受く。奉天には既に二十年にしなる人
その間の事情を詳しく語られた。土地坊さまで麻雀を打って遊んだが
自動車にて旅館まで送らる。

大月七日(金)晴風強し。

朝食を済まして盛京時報に至る。酒家氏に面会。餘り参考に
すべき調査資料なき旨の趣出発することにせり。社員の取
なしで大連方の紹介先特務機関森岡大佐に面会。旅程その他
調査科目につき色々質問を受ける。自分の旅行より得た体験及び
その地の状況殊に詳しく話して呉れた。たい最后に夏期
は馬賊横行する為め充分慎重を要すと結ばれた。一時半餘に

して辞す。帰途再び立寄るべしとの市原意あり。ハルビン特務機関への紹介状を貰ふ。　万澤氏を訪ねるも不在、夕食後再び訪ぬ。書院剣道部の様子も知らして置く。奉天の町は黄塵万丈文字通りだ。十時十分の列車に搭ず。松花江流域現と同様。先輩小坪、安武さんの市見送裡に奉天を辞す。車中支那人喧騒にして二時間ばかりつかれする。しばしをにして夜が百人ひ来た。

六月八日(土)晴。

車窓より見る沿線の風景まさに大陸的壮大美を帯びて来る。沙漠を思はせる様な大平原ではあるが、実にそれがよく耕されてゐる。イヌフルも高粱、豆である。満州の平野は沃野千里である。旺野千里とは誰が言ったかの。七時長春駅頭に現はる。長春は奉天に比し樹木多く美しく朝の空気にドッシリとあさまり迫ってゐる。感じの良い町だ。黄塵と風の強い奉天の町も周囲に一大森林地帯を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com